

---

# ヒトカゲの旅 番外編短編集

Lino

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒトカゲの旅 番外編短編集

### 【Nコード】

N2283H

### 【作者名】

Lino

### 【あらすじ】

「ヒトカゲの旅」の登場キャラ達の短編集です。彼らのどんな物語が繰り広げられるのか……いろいろと不安です（汗）

## 口ホ島の掟（前書き）

気分転換に書いていたら……いつのまにかこんな時間になり、しかも完成してしまったという（笑）

バクフーン

「マジで止めてくれや作者」（泣）」

もう遅い（笑）

何故「口ホ島の掟」ができたのか、それにはバクフーンの過去が関わっていたんですね。

……マグマラシが主人公の短編がかぶってしまいました。ご了承くださいm（´）（´）m

## 口ホ島の掟

「お前、この島の掟を知っているのか？」

「……掟？」

それはヒトカゲが旅をするために島を出ようとした時だった。いきなり目の前に現れたエンテイが「掟に反する」という理由でヒトカゲを止めたのだ。その掟を知らなかったヒトカゲに、エンテイは「口ホ島の掟」を述べた。

「この島に住んでいるポケモンは皆、進化で最終形体になる、もしくはそのポケモンと同伴でなければこの島を出ることはできない。つまり、お前だけを通すわけにはいかないのだ」

一体、何故口ホ島にだけこのような掟があるのか。それはあるポケモンの悪戯がきっかけで作られたのだった。

数年前、ここは口ホ島の海沿いにある「口ホ・ポケハイスクール」。簡単に言えばポケモンの高校である。2階の一番日当たりのいい教室の窓際の席で、あるポケモンが居眠りをしていた。

「……………zzz……………」

彼はマグマラシ。そう、今のバクフーンだ。授業がつまらないことに加え、暖かな太陽の光を浴びていることもあり、机の上でよだれを垂らしながら寝ていた。

「マグマラシ！ 起きなさい！！」

そう怒鳴ったのは女教師のマグカルゴ。その声が耳に届き、ものすごく眠そうな目を擦りながらマグマラシは黒板のある方を見た。

「……………何すか？」

「何すかじゃありません！ 授業中に居眠りするくらいなら、当然この問題が解けるんでしょうね！？」

そう言いながら黒板をバンバン叩くマグカルゴ。そこにはこう書

かれていた。

“ $\tan 1$ 。が有理数でないことを証明せよ”

この高校は進学校。多くのポケモン達がアイランド外にある上の大学を目指して勉学に励むこともあり、授業もハイレベル。その中でもマグカルゴの授業は酷く難しく、彼女が出した問題を解ける生徒はほとんどいなかった。

この問題も、他の生徒は頭バクハツといった状況。しかしマグマラシはぼーっとながらその問題を眺めると、たるそうに答え始めた。

「それ背理法使えばいいんだろ？  $\tan 1$ 。を有理数って仮定して加法定理使っじゃん。したら、 $\tan 30$ 。が有理数で表されるけど、これ無理数って決まってるじゃん。だから仮定に矛盾する。よって有理数でない。……寝ていいすか？」

マグカルゴを含め、教室の生徒が啞然としていた。

(さ、さらにと解いてるっ……！)

マグカルゴや他の生徒達の反応はお構いなしに、マグマラシは再び居眠りを始めたのだった。

そんな秀才のマグマラシだが、今と異なり、当時はかなりやんちゃな性格だった。他の島の街に遊びに出かける度に何かしらの悪戯、世間で言えば迷惑行為をしていたのだ。

マグマラシが悪戯した次の日は、お決まりのパターンが待っているのだ。

「マグマラシ！ ちょっと来い！」

まず、授業中にも関わらず教頭のヘルガーに呼び出される。「へい」と言いながらマグマラシが教頭について行く先は決まって校長室。

そこにいるのは、校長のギャロップ、当時は警部だったニドキング、そしてアイランドの番人だ。今日はライコウが来ていた。

「今回はベルデ島の公園にある噴水の水に洗剤を入れ、さらに緑色

にしたようだな」

今回マグマラシがした悪戯は、噴水の水で緑色のシャボン玉を大量に作るというものだったらしい。ベルデ島の子供達は大喜びしていたが、大人達にとっては畑や道端が緑色の不思議な物体がうごめいていてかなり迷惑していたようだ。

「さ、来なさい。お仕置きだ」

当時、学生を逮捕することはできないが、お仕置きすることは許されていた。お仕置きを施行するのは大抵番人が警部の仕事だ。

「うっ、うっ、ごめんなさい……もう絶対にしませんから……」

突如、マグマラシが両前足に顔を埋めながら嗚咽し始めた。悪いことをしたとはいえ、マグマラシはまだ子供。過ちを繰り返して成長するのだ。こんなに泣きながら反省しているのだから許してやるうかと教頭は思ったが、ライコウが言った言葉を聞いてそれを取りやめにした。

「泣きマネはもう通じないぞ」

「ちっ……」

(……この生徒は……)

ずる賢くもあつたマグマラシ。彼はこの後、ライコウが得意としている、じわじわ与える“でんきショック”を1時間浴びせられた。

勉強もできて、悪戯大好き。一見どちらをとっても友達が多そうな気もするが、実はマグマラシの友達はほとんどいない。親の仕事の都合で各地を転々としているため、友達ができる寸前でいつも転校していたのだ。

今回は高校ということもあり、勉学に勤しむために口ホ島で1人暮らしを始めたのだ。まだ口ホ島に来て数カ月しか経っていないく、さらにマグマラシ自身すごくポケ付き合いが苦手で、なかなか友達を作れないでいた。

そして1人暮らしの開放感も加わり、悪戯をするようになったのだと、後に彼自身、つまりバクフーンは言う。

「あゝ毎度だけど痛ってえあのオッサンの“でんきショック”」  
帰り道、1人ぶつくさと言いなながらマグマラシは歩いてた。所々体毛が焦げているのは気のせいだろうか。

そんな時、向こうから誰かがやってくるのが見えた。しかし夕日が重なってよく見えない。目を細めてよく見ると、自分の家の近くに住む、今のヒトカゲの父親、ウインディがこちらに向かって歩いてきていた。

「……何で私にがんたれてるんだ？」

「い、いやいや、違いますって」

ウインディにそう言われるのも仕方がない。彼だから疑われるのだ。

「それで、お前また悪戯してライコウ様に怒られたんだって？」

この島は情報が伝わるのがものすごく早い。どんな小さな話でも1日あれば島全体に伝わってしまうほどだ。

「だって、みんなして俺がやったって言うから……俺本当は……」

「やったんだろ？」

「……はい」

ウインディには全てお見通しであった。

「まったく……お前はいつも悪戯ばかりして、みんなに迷惑かけすぎだぞ」

「えへへ」

マグマラシは舌を出しながら照れ笑いしていた。ウインディはやれやれといった様子でため息をついた。

そしてウインディは口にくわえていた袋からリンゴを取り出すと、2、3個マグマラシに渡した。

「ま、これでも食べなさい。腹減ってるだろ？」

ウインディはマグマラシの事情をよく知っている。それでこのところマグマラシの事を気にかけていて、優しく接してあげるのだ。

「うおっ、リンゴ！ ありがとうウインディのおじさん！」

「悪戯も程々にするんだぞ。それじゃあ」

軽く注意すると、ウインディはマグマラシと別れた。マグマラシはその場でリングゴをかじりつく。

「かあ〜うめえ〜！ ウインディおじさんがくれる食べ物っていつもうまいもんばっかだな〜」

自分がかじったリングゴを見つめながらマグマラシは満足気になっている。残りのリングゴも食べ終わると、マグマラシは自分の家へと帰っていった。

その日の夜、マグマラシは自分の家で考え事をしていた。

「明日は学校休みだけど、何すっかなあ〜？」

“何をするか”というのは、“どんな悪戯をするか”という意味である。あれだけライコウにお仕置きされようがウインディに注意されようが、悪戯したときの快感を覚えてしまったせいではなかなかやめれないでいた。

一生懸命考えながら、ふと付けっぱなしにしていたテレビに目をやる。その画面に映っていたものを見ると、マグマラシの頭の中に2人のマグマラシが現れた。

おっ、これはおもしろそうだな。いつちょやってみるか！

背中が黒く、邪悪な目つきをしている悪魔、通称デビル・マグが悪戯しろと薦める。

ダメだよ、あれだけ他のポケモンに迷惑かけたじゃない！ もうやめなよ！

デビル・マグとは反対に、背中の体毛が綺麗な深緑色をしていて、丸く大きな目をしている天使、通称エンジェル・マグがそれを止めようとする。

（待て待て待て！？ 頭の中で2人の俺が言い争ってるぞ！？）

混乱し始めたマグマラシ。その間にもデビル・マグとエンジェル・マグが脳内でバトルしていた。

お前はすっこんでろ！ “かえんぐるま”！

悪戯なんかさせない！ “スピードスター”！



数分間激しいバトルが繰り広げられたが、こういう場合、オチと  
いうものは決まっているのである。

よっしゃあ！ マグマラシ、やるしかねえだろ！

ダ、ダメ……だ……

デビル・マグの圧勝でバトルは終わった。マグマラシの脳ではデ  
ビル・マグの思う様に思考が変えられた。そしてマグマラシは一言  
だけ言った。

「よしっ、決まり」

彼の悪戯はこうして決まるのであった。

次の日、マグマラシは船に乗ってアスル島までやって来た。当時  
のアスル島は発展途上の最中で、近未来的な建物と古びた廃屋が入  
り混じっていた。マグマラシが目をつけたのは後者の方である。

「さ〜と、爆竹も用意したし、空き家を探すか！」

意気揚々とマグマラシは空き家を探すために郊外へと向かった。

実は彼が昨日見たテレビ番組の内容は、ビリリダマとマルマイン  
が“だいはくはつ”で行う巨大建造物爆破解体を特集したものだっ  
た。その解体の美しさに見とれ、やりたくなってしまったようだ。

だからと言って、ダイナマイトを買うほどバカではないマグマラ  
シは、お手製の少々威力の強い爆竹で壊れるほどの小規模なものを  
やるうとしたようだ。

「おっ、いいとこ発見！」

しばらくしてマグマラシが見つけたのは、3階建てで木造の小さ  
な廃ビル。周りにポケモンは住んでいる気配もなく、まさに悪戯に  
は打ってつけの場所だった。

早速中に入ると、辺りはクモの巣だらけだった。何年も使われる  
どころか立ち入りさえされなかったように見える。

「うへー気味悪い……」

さすがのマグマラシも少々怯えていた。しかしまだ昼間だという  
こともあり、窓から光が少し差し込んでくるのを見ると安心し

た。

「えっと、まずここにセツトして、次はあそこで……」

マグマラシは淡々と爆竹をセツトしていく。1階部分は難なく完了。2階に上がる際に木でできた階段が抜け落ち、足がはまるというハプニングが発生したが、まるで日常茶飯事の如くそれを“かえんほうしゃ”で焼き切り、2階へと登る。

そして直に2階部分もセツトが完了した。ちよつと疲れたのか、マグマラシはその場に座り込んで一息ついた。

「ふう〜。案外疲れるもんだな、これ」

残るはあと3階部分。これさえ終われば芸術作品が見れると思つたマグマラシは「うしっ」という掛け声とともに起き上がった、その時だった。

ギシッ……

何やら上の階からきしむ音が聞こえた。気のせいかと思い、3階へ上がるうとした。

ギシッ……

また聞こえてきた。今度ははつきりと耳に伝わった。自分以外に誰もいないはずなのに、マグマラシは不安になってきた。その不安が的中したとわかつたのは、すぐの事だった。

「……誰だ？」

階段から1匹のポケモン、サイドンが降りてきた。睨みながらマグマラシの方へ向かって来る。

「あ、あ……」

マグマラシは驚きのあまり腰を抜かしていた。実はこのサイドン、

全国に指名手配されている極悪ポケモンなのだ。

「ガキか……俺に何か用か？」

そうサイドンに言われると、マグマラシは首を横に素早く振った。この時、マグマラシはサイドンの事が怖くて仕方がなかった。そんな様子を見ながら、サイドンは独り言を言うかのように話をした。

「まあ、俺に用があるうがなかるうが関係ない……何故なら……」

次の瞬間、サイドンから殺気を感じた。

「俺の存在を知られたからには、誰だろうと生かしておけねえからな……」

サイドンは不敵な笑みを浮かべながらマグマラシにじりじりと近づく。マグマラシは後ずさりするしかなかった。

（お、俺、殺されるの……？ 嫌だよ！ まだ死にたくない！）

この時ばかりは、悪戯していたことを本気で後悔した。自分が悪戯しようと思わなければ今こんな事になってなかったのに……そう思っても時すでに遅し。

とうとうマグマラシは部屋の一角に追い詰められた。逃げ場はもうない。

「覚悟はいいか？」

サイドンがそのツメをマグマラシに見せびらかしながら言った。

万事休すかと思われた、その時だった。マグマラシはある事を思いついた。

（……そうだ！ 一か八か……）

助かる方法があるならこれしかない。そう思ったマグマラシは行動に出た。

「かえんぐるま」！

マグマラシはその場で“かえんぐるま”でサイドンに突っ込んだ。だが全然効いていないようで、サイドンは平気な顔をしている。

「無駄な抵抗を……まあいい、今楽に死なせてやる」

「へっ、それはどうかな？」

「なに？」

何故かマグマラシは余裕の表情を浮かべている。そう、マグマラシが“かえんぐるま”をくりだしたのはサイドンを攻撃するためのものではなかった。

「3……2……1……」

その場でマグマラシがカウントダウンすると、それは起こった。

ドカーン！

「なっ！？」

刹那、廃ビルが爆発した。マグマラシは“かえんぐるま”で飛び散った火の粉でセツトした爆竹に火をつけ、ビルを爆破させたのだ。それは一瞬の出来事で、サイドンもマグマラシも何もできずに木の柱の雪崩に飲み込まれる。

数分後、爆発音を聞いて駆けつけた警察などが廃ビルに到着した。救助隊がビルの残骸からサイドンとマグマラシを発見すると、急いで応急手当を施した。2人とも意識ははっきりしていて、大した怪我もしていない。

「サイドン、お前を強盗と殺ポケ未遂で逮捕する」

ニドキング警部が手当ての終わったサイドンの手と足に錘おもじをつけた。観念した様子のサイドンだが、ニドキング警部やその場に来ていたエンテイとライコウに反論した。

「おい、殺ポケって何だよ？ 俺は誰も殺そうとしてねえぜ？」

「とばけるな。だったら誰がこのビルを爆破させたというのだ？」

サイドンは鼻先でその爆破犯を指す。その方向を見ると、誰もが驚いた。

『マ、マグマラシだと！？』

慌てた様子でニドキング・ライコウ・エンテイはマグマラシの元へ駆け寄った。

「マグマラシ、どういふ事が説明しろ」

「うつ……じ、実は……」

マグマラシは正直に今回の経緯を説明した。それを一通り聞き終わった3人は一安心した様子でマグマラシを見た。

「とにかく、無事でよかった……よくそんな無茶を……」

「だって、本当に殺されるかと思っただから、俺……」

そこまで言うと、マグマラシは泣き出してしまった。本当に怖い思いをしたのだろう、3人は聞かずともそれを理解した。慰めようとニドキングはマグマラシの背中を優しくさすってあげた。

しばらくして泣き止むと、マグマラシはいつもの元気を取り戻した。

「じゃあ、家に帰ります!」

その様子を見た3人が、「ちよつと待て」とマグマラシを止めた。

「ん? どうかしました?」

そのあどけない表情は、一瞬にして再び恐怖に満ちたものへと変わる事となる。

「どうかしました? マグマラシ、お前って奴は……」

「サイドンの逮捕と、お前の悪戯とは話が別だ!」

「ビル爆破だと!? この大バカ野郎があ……!!」

ニドキングはもちろん、ライコウとエンテイもかなり怒っていた。マグマラシは何とか機嫌を取り戻そうと必死で笑い顔をつくる。

「い、いやだから、これは、今にも壊れそうな建物をそのままにとくよりは……ね? ハハハ……」

もう何を言っても無駄だった。怒鳴り口調のままエンテイはマグマラシを厳しく叱った。

「お前はこれからお仕置きだ! それと罰だ! バクフーンに進化するまで口ホ島から出ることを禁ずる!」

「ええっ!? ちよつ、島から出れないって、そりゃあ……」

「黙れ!! お前のした事は一歩間違えれば命の危険にさらされるんだ! 反省しろ!!」

そのままマグマラシはニドキング達に連れられ、みっちり絞られた後にお仕置きをくらった。“でんきショック”はもちろん、宙吊りにされて体毛を引き抜かれたり、“どくばり”を刺されたりと、今までにないくらいのお仕置きを受けたのだ。

それ以降、同じようなことがあつてはならないと、ロホ島を管理するエンテイは「ロホ島の掟」をつくつたのだ。内容はマグマラシに与えた罰とほぼ一緒で、子供（進化しきつてない）なら単独で島を出れない。出るならば大人（進化しきつたポケモン）と同伴という決まりになつた。

時は変わつて現在。ヒトカゲがゼニガメ・チコリータ・ドダイトスを連れてロホ島を離れてから数日後。

「あゝいい天気だな」

自分の家の近くにある海岸で、バクフーンが日向ぼっこをしていた。そこに突如、エンテイが現れた。

「何をしている？」

「いや、ただ日向ぼっこしてるだけだよ」

そんなバクフーンを見て、ふと昔の事を思い出したエンテイ。

「……変わったな、お前も」

そう言われ、バクフーンもまた昔の事を思い出す。「あの時はささくれていたなあ」としみじみと振り返っていた。その時、今度はライコウが現れた。

「エンテイ、ベルデ島の大富豪・メガ家の庭が相当荒らされていたようだ」

番人の間でその話をし終わると、2人は同時にバクフーンの方を向いた。

「……へっ？ な、何だよ？」

「お前がやつたんだろ？ まったく、数年経つても私達にお仕置き

「されたいようだな」

「えっ、いやいやいやいや!? 俺じゃないって!」

「さ、こっちへ来い」

バクフーンは強制的にエンテイとライコウにどこかへ連れて行かれた。火山付近から悲鳴が聞こえたのは、それからわずか数分後の事であった。

バクフーンが無実だとわかったのは、ヒトカゲが再び口ホ島に戻ってきてからの話。

## 口水島の掟（後書き）

バクフーン

「お、俺の汚点があゝ（泣）」

あゝあ、悪ガキだったんだ（笑）

まあ、今はまともな（？）大人になったからいいじゃない。

バクフーン

「闇に葬りたかった過去が……」

さて次回は、キャラ投票で票を獲得したキャラ達の短編がスタートします。

……本編が完結した後に投稿です（汗）

バクフーン

「って無視!？」



## 腹黒子コリータ（前書き）

さてまずは……ごめんなさい（汗）

ヒトカゲ

「あつ、謝った（汗）」

約半年振りの更新です（汗）ネタが思いつかなかったのではなく、納得のいかないのでボツ、ボツ、ボツ……と修正していったら、1月に完成しました（汗）

そしてどうせならと思って、クリスマスまで取っておきました。いい出来になったかどうかは不安ですが、とりあえず、読んでみて下さい。

ヒトカゲ

「そして、実はコラボ作品だったりするわけ」

## 腹黒チコリータ

それは4人がアマリジヨ島にいる時だ。明日にも『雷光郷』目指して出発する前の晩、4人は野宿をしていた。ヒトカゲとゼニガメは食料を調達しに近くの林へ行っていて、残されたチコリータとドダイトスは薪で火を熾おこしていた。

たった2人だけの時間と空間。こんな時に恋をしている者が考えることはただ1つ。近づきたい。2人の距離を縮めたいと思うのが、恋する乙女が願う事。

「ね、ねえ、ドダイトス……」

物凄く顔を赤らめながら、愛しい者の名を呼ぶチコリータ。緊張しているせいかな、言葉が思うように出てこない。

「どうかしましたか？ お嬢」

その声が耳に届き、いつものように振り向くドダイトス。その様子から、彼はチコリータがどんな想いでいるのかは気付いていないようだ。

「……いえ、何でもありませんわ」

「そうですか？ ちょっとした事でも何かあつたら言ってくださいね」

そう言うと、ドダイトスは再び薪に目をやる。その横でドダイトスに背を向けながら、チコリータは大きくため息をついた。

「……はあ……」

じれったい。勇気を振り絞って一言だけ気持ちを伝えるだけなのに、そんな事もできないのかとチコリータは自分に対して腹を立てていた。

“好き”。それだけを想いを馳せている人に言えば済むことなのだが、それをなかなか言えないのが乙女というものである。

(どうして言えないのかしら？ そしてドダイトスはどうして気付いてくれないのかしら……)

チコリータは過去にこのような事を何回も考えたことがあった。ドダイトスは警備員という仕事をこなすためだけに私に関わっているのか、そうでなくても、私には一切興味はないのだろうか。考える度に悩みは積もっていくばかりである。

（私は、ドダイトスが好き。叶わない恋だっただけ。だけど、この想いだけは伝えたい！）

そう決心すると、チコリータの足は自然とその場から離れていった。その足音が聞こえたドダイトスはすかさず声をかける。

「お嬢、どこへ行くのです？」

「ちよつと、1人で散歩がしたいのです」

どうやら、チコリータはこつそりと予行演習をする気のようにだ。

ドダイトスはただの散歩としか思っていないため、それを止める。

「いけません！ 1人では危険すぎます！ 私が一緒に同行しますよ」

「大丈夫よ。まだ比較的明るいし。お願い」

これにはドダイトスも、どことなくチコリータの様子がおかしい気がしてきた。ドダイトスは理由を尋ねる事にした。

「どうして1人で行きたいのですか？」

この質問にはさすがにチコリータも答えに詰まる。なかなか答えが出てこず、下を向いて黙りこくってしまった。

「……1人がいいの。お願い、行かせて！」

「ダメです！ 行ってはなりません！」

こういう時だけはムカつくと感じるチコリータ。変な使命感みたいなものがあるのか、ドダイトスは頑なに考えを曲げようとしない。どうしても許可をくれないドダイトスに対し、チコリータは最終手段を用いることにした。

「……ナランハ・オボン・ボジョレーノ」

チコリータがその単語をぼそつと言った瞬間、ドダイトスは驚愕の表情を浮かべた。

「お、お嬢！ な、何故それを……！？」

ドダイトスの顔面からは大量の汗が吹き出ていて、若干ではあるが足も震えている。チコリータは不敵な笑みを浮かべてドダイトスをチラ見した。

「数年に1個取れるか取れないか、それくらい貴重な“ナランハ・オボン”。それで造ったお酒は時価で軽く600万ポケを越えますよね。それを黙ってうちの酒蔵から出して……」

メガニウムに知られると、確実にドダイトスに死刑判決が言い渡される内容をべらべらと喋るチコリータ。さすがのドダイトスもたじたじた。

「ちょ、ちよつとそれは……」

「あゝあ、お父様が知ったらどうなるのでしょうかね？ お父様もちよくちよくしか口にしない程の貴重なお酒が空になったなんて……」

「わ、わかりました！ 行ってらっしゃいませ、お嬢！ 気をつけてくださいよ、もう……うっ……」

弱みを握られていたドダイトスは泣く泣くチコリータに散歩の許可を出した。そんな事より、チコリータの父であるメガニウムにこの事がバレれば、おそらく命はない。ドダイトスはそれしか頭になかった。

同時刻、同じ島の中に位置する『雷光郷』では、1匹のポケモンが道に迷っていた。地図を持っているようだが、今自分がいる場所は地図に載っていないらしい。

「はあー、ここどこよー？」

赤を基調とした体に翼があり、まだ少し幼さが残っているような顔をした、メスのむげんポケモン、ラティアスがだれながら辺りを彷徨さまよっていた。

「もーどこにあんのよー“エレデンポフィン”はー？」

このラティアスが右手に持っているのは、アイランドーと称されるポフィン屋“エレデンポフィン”のチラシ。この有名な店のポフィンと食べるためだけに、このラティアスはわざわざ遠方からや

ってきたのだ。道に迷ってはいるが。

その時、ラティアスの目の前に大きな雷が落ちてきた。しかしラティアスの頭にはポフィンのことしかないためか、一切動じない。雷によって煙幕が発生し、しばらくはその場の視界が遮られたが、すぐに煙幕は晴れた。すると、煙幕の中からポケモンが現れた。

「……何者だ？ 俺の領域に脚を踏み入れる奴は……」

ラティアスの目の前に姿を現したのは、アイランドの番人の1人、ライコウだった。ラティアスのことをじっと睨んでいる。大抵のポケモンなら、番人に睨まれると恐れをなして1歩引いてしまう。大抵のポケモンなら。

「あつ、おじさんグッドタイミング “エレデンポフィン” ってどこー？」

「……お、おじさん？」

あろうことが、見ず知らずのポケモンに対していきなりのおじさん呼ばわりをするラティアス。初めて“おじさん”と言われたライコウは目を丸くしている。

(このガキ、何なんだ一体……)

「ガキだなんて失礼ねー、私にはルーチエって名前があるの、ルーチエ。ほら、さんはいつ」

このラティアス、つまりルーチエを疑っていたライコウの心はルーチエのテレパシーによって読み取られていた。さらに弄もてあそばれているようにも見える。

「そ、そんな事はどうでもいい。この雷光郷 俺の縄張りに脚を踏み……」

「足なんか地面についてないもーん」

「……………」  
揚げ足を取るルーチエ。それにライコウはただただ呆れるしかなかった。

「それより、私“エレデンポフィン”に行きたいの。もうお腹空きすぎて移動するのめんどくさいから、おじさん連れてって〜」

「なっ……！？」

拳句の果てに、ルーチェはライコウを召使扱いしようとした。当然だがライコウは速攻で拒否した。

「冗談じゃない！ 何でこの俺がお前を運ばなければならないのだ！？」

「……運命？」

ルーチェの一言を聞いて、ライコウはもう何も言えなくなってしまう。もちろん、ライコウが口で負けたのはこれが初めて最後である。

（好きです！ ……いや、前から好きでした！ の方がいいのかなあ……）

そんな事を考えながら歩いていると、チコリータは街まで来てしまっていた。辺りはすっかり日が沈んで街灯が付き始めた。街を歩くポケモンの姿も少ない。

（とにかく言えるように練習しなきゃ。今のうちに練習して、戻った時には……）

チコリータがそんな事を考えながら歩いていると、よそ見をしていたせいか、誰かとぶつかってしまった。体が小さいチコリータはぶつかった拍子にコロコロと後転している。

『痛たたたた……』

頭を軽く振って起き上がると、チコリータは目の前のポケモンに「ごめんなさい」と軽く謝り、まともに顔を見ないままその場から立ち去ろうとした。

「ちょっと待って。今ぶつかったチコリータ」

その声が耳に届きチコリータが振り向くと、そこにいたのは先程ぶつかったポケモン、ラティアスのルーチェだった。チコリータはこのラティアスに怒られるのかと思っていたが、予想だにしない発言がルーチェの口から出てきた。

「悩みがあるのね、しかも恋の」

「えっ!？」

いきなり見ず知らずのポケモンに心を見透かされ、チコリータは動揺する。どうやら互いにぶつかってしまった拍子にルーチェは無意識にテレパシーを使ってしまったらしい。

「ど、どうして私の悩みを……!？」

「それはおいといて、私にその悩み、話してみてごらん? あ、ちなみに私はルーチェって名前ね」

少しばかり興奮気味のルーチェ。いきなりそんな事を言い出すルーチェを変に思いながらも、チコリータはせっかくのチャンスが無駄にはいけないと、藁をもすがる思いで、思い切って話してみることにした。

「ふーん。そういうこと」

チコリータから一通りの話を聞くと、ルーチェは腕組みしながら納得した表情を浮かべる。

「つまり、あなたはそのドダイトスの事が好きで、どうすれば彼が振り向いてくれるかってことね？」

ルーチェはチコリータの悩みを簡単にまとめる。チコリータはゆつくりと頷くと、ルーチェは大胆な一言を放った。

「キスしちゃえば？」

「キ、キス!？」

「そうよー。私だったらそうするな。まあ私の場合、ブラキオ……あ、旦那にしてもらおう事の方が多いけどね」

チコリータはそれを聞いて顔を真っ赤にする。それもそのはず、ルーチェは告白を通り越していきなりキスしろと言いだしたのだから。

「そ、そそそんないきなりキ、キ、キスだなんて……」

「あら、あなたが思ってるよりは簡単にできるわよ?」

ルーチェは軽く言うが、そんな簡単にいくはずはないだろう、そうチコリータは思っていた。できるならとつくにやっていたはずで

ある。

「でも、そううまく具合にいくはずが……」

「大丈夫よ。ちゃんと作戦があるんだもの」

「……作戦？」

その作戦に興味を持ったのか、チコリータは食い入るようにルーチエの話を聞く。どうやら「男を落とすための作戦」のようだ。その作戦の内容まで聞くと、2人は互いに目を合わせた。

『……ふふふふ……』

気が狂ったかのように笑い出す2人。この様子からとんでもない作戦である事は間違いなさそうだ。この時、ドダイトスとブラキオは激しい悪寒に襲われたそう。

次の日、ヒトカゲ一行は雷光郷目指して歩き始めていた。雷光郷の入り口はどこにでもある普通の森で、青々とした草木が生い茂っている。

「いつになったら森抜けれるのかな？」

「今入ったばかりじゃん」

早速ゼニガメに突っ込みを入れられるヒトカゲ。そんないつものやりとりを後ろからドダイトスが楽しそうに見ている。そして、ドダイトスの横にぴったりくっつきながら、チコリータはずっと何か考え事をしていた。

(……ああで、こうで、こうなって……)

頭の中で一生懸命何かの確認をしているようだ。そのせいか、いつもと様子が違うように見えたというドダイトスに声をかけられた。

「お、お嬢、何かありましたか？」

「ひゃっ！ な、何でもないわけあるじゃない！」

「はい？」

不意に声をかけられたせいで物凄く驚いてしまったチコリータ。言葉遣いまでおかしくなってしまった。それほど真剣に考え事をしていたようだ。



そんなやりとりをしていると、突如辺りを霧が覆う。隣に誰がいるかもわからない濃い霧だ。みんなは少し不安がるが、チコリータの横にはあのポケモンがいた。

「ちよつと、大丈夫なの？」

小声でそう話しかけてきたのは、ルーチエだった。実はこの霧、

“ミストボール”でルーチエが故意に作ったものだ。

「私ずつと見ててあげるから、ちゃんとやりなさいよー」

「だ、大丈夫よ」

そう言つと、ルーチエは霧の中に姿を隠した。励ましを受けたチコリータは深呼吸をしながら心を落ち着かせる。やがて、霧が晴れていった。

「なんか凄い霧だったね」

「しかもすぐに消えたよな」

「何だつたんでしょうね？」

チコリータ以外、全員がこの霧を不思議がつっていた。そんな事はお構いなしに、チコリータは勇気を出し、作戦を実行する決意を固めたようだ。

（よし、行くわよ！ 待つてなさい。必ずキスを……）

もはや思考が軽く暴走し始めている。腹黒チコリータ、ここに参上。

「あつ、あれがもしかしたらライコウの住処……？」

遠くの方に、この場所から見えるか見えないかくらいの洞穴らしきものを指してチコリータは言った。それにつられて他の3人もそちらを見る。

「え〜っ、どれ〜？」

「あれ？ いや待てそれでなくて……こつち？ あー頭痛えよ〜！」

「う〜ん、ここからじゃはつきりしませんね」

3人がその洞穴らしきものを見ている隙に、チコリータは“くさむすび”をくりだして何束か罾を仕掛けた。

（作戦1。一緒に転んでキスをする！）

ドダイトスを“くさむすび”で転ばせ、それと同じタイミングでチコリータもわざと転ぶ。偶然の事故を装って出逢うのは……といった具合である。

チコリータはこの作戦を99%成功すると確信していた。これ以外に作戦を考えなくてもよかつただろうと後から思うくらい、自信があつたようだ。

「ちよつと見えづら……のわっ!？」

予想通り、ドダイトスは自分の足元に作られた“くさむすび”に引つ掛かつてしまった。そのままバランスを崩し、一瞬であるが体が宙に浮きあがる。

ここまではチコリータの計画通り。後は一緒に転ぶだけで全てが整うはずであつた。

だがまさかの事態が生じてしまったのだ。ドダイトスは引つ掛けた右足をさらに地面でけつ躓き、反動でさらにチコリータの方へ向かつてきたのだ。

「えっ、ええっ!？」

為す術もなく、チコリータはドダイトスに潰されてしまった。地面にはちよつどチコリータが隠れることができるくらいの大さの穴ができている。

ここで少し考えてほしい。このドダイトスの体重は普通のドダイトスより重い330kg。ということは、チコリータにかかつている力は3t以上になる。

(あーあ、ご愁傷様)

ルーチエは目を瞑って合掌する。だがその後ルーチエが見たのは、チコリータがドダイトスから抜け出し、体中からだについた土を掃う姿だつた。

(つ、次の作戦よ……)

恋の力は凄まじいようで、ドダイトスを想う気持ちは3tの重さを小動物並みの重さを感じさせてしまっている。

(作戦2。熱があるフリして顔接近！)

チコリータは次の作戦に移る。説明するまでもなく、名前の通りである。

「お、お嬢、さっきは大丈夫でしたか？」

「だ、大丈夫ですけど……」

お護りする者を自分で押しつぶしてしまったことを恥じながらドダイトスはチコリータを気遣う。それをいいことにチコリータはこぞとばかりに具合の悪そうな顔をする。

「けど？」

「な、何だか熱があるみたい……」

「ん？ どれどれ」

ここでも予想外の出来事が。今のチコリータにとってはKY的存在であるゼニガメが近づいてきたのだ。邪魔されてなるものかと、チコリータは“つるのムチ”でゼニガメの足を引っ掛けて転ばせた。「大丈夫ですか？ お嬢」

ようやくドダイトスが近づいてきた。それを確認するや否や、すかさずドダイトスの元へ駆け寄ろうとするチコリータ。だがまた災難が起こってしまう。

「……きゃっ!？」

ドダイトスへ向かって走っている途中、自分が先程仕掛けた“くさむすび”に足を引っ掛けてしまったのだ。走るスピードがいつもの2倍近くだったためか、相当な勢いで顔から地面へ向かって行った。

全員が心配になり駆け寄るも、チコリータはまたしても自力で起き上がり、顔についた土を掃う。恋する乙女の力は凄まじい。

「……な、なんのこれしき！」

(あら、あの子思ったよりやるわね)

感心しながらルーチェはチコリータを見ていた。でも自分から比べたらまだまだ甘い。次の機会にはもっと鍛えてやらねばと思う彼女だった。

(最後の作戦。寝ている時にキスよ！)

もはや度を越した域に達している。しかしこれを考えたのはチコリータではない。世間知らずのお嬢様に恋の極意という名の作戦を伝授したのはすべてルーチエである。

(ルーチエ、お願い！)

(はいはい、いくわよ！)

チコリータが木陰に隠れているルーチエに向かってウインクする。作戦実行の合図だ。それを見たルーチエは、“ミストボール”を放って辺りを霧で埋め尽くした。

(さあ出番よ、行ってきて“ねむりごな”！)

ここでルーチエが合図を出すと、自分の後方から多数のバタフリーが飛んできた。このバタフリー、実はルーチエによって集められたポケモン達だ。「協力してくれたらこの写真焼き増ししてあげる」と言っ、ブラキオの写真を見せたただけなのだ。

霧によって視界が遮られている中、バタフリー達は一斉に“ねむりごな”を空中から散布する。その粉はみるみるうちに地上へと舞い落ち、ヒトカゲやゼニガメ、そしてドダイトスの鼻へと入っていく。

『……………zzz……………』

ルーチエの耳には、複数人の寝息が聞こえてきた。これでもう条件は整った。あとはチコリータが思いつきりドダイトスにキスするだけとなった。

(……………やっぱり……………)

しかし嫌な予感がしていたルーチエが霧の中に突っ込んで様子を見ると、そこにはルーチエの予想通り、“ねむりごな”を吸って寝てしまっているチコリータの姿があった。

「あれほど注意しなさいよって言ったのにーもー」

これでチコリータのキス大作戦は儂くも、幕を閉じてしまった。

これ以上ここにおいても仕方がないので、チコリータに向けて手紙を

書き置きし、ルーチェはそのままエレデンポフィンへと向かって行った。

約1時間後、日が暮れて辺りはすっかり暗くなっている。“ねむりごな”によって眠らされたヒトカゲ達の中で、1番先に目を覚ましたのはドダイトスだった。

「……ん、寝てしまったのか……」  
首を振って目を覚まし、完全に開いた目で夜空を見ようとしたり、その時だった。ドダイトスの鼻の上に、優しく、白い綿が舞い降りた。

「……………」  
その綿がなくなるまで見続けた後、すぐにチコリータを起こしに向かった。前足でぐいぐいと体を揺する。

「お嬢、起きてください」  
本人にしか聞こえない程度の小さい声でそう言うと、唸り声を上げながらチコリータが起きた。眠そうな目を擦ってドダイトスの方を見る。

「どうしたの……？」  
「ほら、あれを見てください」  
ドダイトスに促されるままに空を見上げると、そこからは神秘的な綿がいくつも落ちてきていた。

「……わあ、雪……」  
そう、雪だ。セレステ島に近いこともあり、アマリジヨ島でもたまに雪が降ることがあるのだが、この時期に降るのは珍しいと知ったのは後の事だ。

チコリータとドダイトスだけ、この雪が降る光景を楽しんでいた。黒の世界に舞い降りる、白い天使達。それを祝福するかのように、2人はずつと眺めている。

「……お嬢」  
不意にドダイトスに声を掛けられた。その声が耳に入り、チコリ

「タはドダイトスの方を振り向いた。その時、何かが顔に当たった。……!?!」

一瞬にしてチコリータの思考が全て停止してしまった。彼女は今自分に起きている状況が理解できていない。顔を真っ赤にしている彼女のすぐ傍には、目を瞑っているドダイトス。

それは本当に一瞬であった。少し距離を置いて、まだ半硬直状態のチコリータに向けてドダイトスが語りかける。

「気づいてなかったとでも……? 一応、私はお嬢の警備員ですからね?」

少しだけ照れくさそうな顔をしているドダイトス。全てを知っていたかのような口ぶりです。チコリータもあまりに信じられない出来事に、まだ緊張している。だがはつきり理解できたことがあった。

ドダイトスは、私のこと

「店長さん、もうないのー?」

一方その頃、街まで戻ったルーチェはようやくエレデンポフィンに行くことができ、思う存分ポフィンを食べていた。そのせいで夜に販売する分がすぐに売り切れとなってしまうたのは言うまでもない。

「じ、嬢ちゃん勘弁してくれえ。もう材料すらねえよ!」

「じゃあきのみ取ってきてよ」

エレブーとデンリュウは、ある意味史上最強の客を前に、ただ困惑して佇むしかなかった。

## 腹黒チコリータ（後書き）

というわけで、ハーブさんからルーチエをお借りしました。リメイク前のメガストを参考にしました。

え〜ハーブさん、大変長らくお待たせして申し訳ございません。そしてルーチエというキャラをぶっ壊していたらさらにごめんなさい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2283h/>

---

ヒトカゲの旅 番外編短編集

2010年10月9日01時51分発行